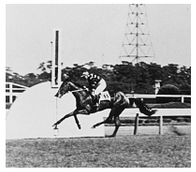

ムカシの競馬を読む

須田鷹雄（すだたかお）

1970年東京生まれ。競馬ライター。サラブレ、大阪日刊スポーツなど各種媒体に寄稿中。

第128回 10年・20年・30年前の4月

いまから10年前、平成18年の4月というと、桜花賞をキストゥヘヴンが、皐月賞をメイショウサムソンが制した月。4月17日付のサンスポから引用しよう。

「馬主歴30年以上のオーナーも、初のクラシック制覇を目前に直線からゴールまで、コブシを突き上げ、声を振り絞った。『精一杯叫んだので、声を枯らしてしまった』表彰式後、『メイショウ』の冠で知られる松本好雄氏は、報道陣に照れながら打ち明けた」

あれだけの大オーナーでも30年かかったクラシック制覇。その重みが伝わってくる。

この皐月賞だが、別な馬にはある応援団が駆けつけていた。16日付けのサンスポからご紹介しよう。

「きょう16日の皐月賞に、フジテレビのスポーツバラエティ番組『ジャンクSPORTS』が名付けたフサイチジャンクが出走する。司会の浜田雅功、内田恭子アナウンサーらが中山競馬場に駆け付け、G1獲りを応援。浜ちゃんの5万円を元に、同馬の単勝に賭け続けて増やした約24万円を全額投資する」

ご存知の通り、この時点でフサイチジャンクは4戦4勝。番組が盛り上がるのも無理はない。この皐月賞でも3着と好走するのだが、初の敗戦に馬のショックが大きかったのか、同馬はスランプに。古馬になってからは準オープンで掲示板に載れないような競馬が続いた。こうなるとメディアはフェードアウトしてしまうわけで、そのあたりがこういった企画の後味の悪さである。馬のほとんどは志半ばで敗れていくわけだから、大団円に落ち着くというのはなかなか難しい。

一転して科学の話題。4月7日の朝日新聞夕刊から。

「初の『商業用』クローン馬2頭が米オクラホマ州で生まれたと、家畜のクローン技術を提供するバイアジェン社（米テキサス州）が発表した。ともに雌で、うち1頭はカッティングという米国の馬術競技で250万ドル以上を稼ぎ出した26歳の名馬『ロイヤルブルーブーン』のクローンだ。今年中に計7頭のクローン馬が生まれる予定だという」

記事中にあるように、これは馬術用の馬の話。競馬の場合、クローンはおろか人工授精も認められていないのだから、関係ないといえば関係ない。

ただ、アメリカにはミュール（馬とロバを掛け合わせた、ラバ）の競馬競走があり、こちらではクローンが走ったことがある。これも今から10年前の話で、アイダホ大学の教授が作ったアイダホジェム号とアイダホスター号がレースに向かった最初の「クローンラバ」たちだ。

ラバは生殖能力が無いので、強かったラバのクローンを残して競走を盛り上げようという意図もあったのだと思う。

この2頭のうちアイダホジェムはまずまずの強さで「一般ラバ」と堂々競走して1着になったりもしていた。この実験は全米ミュール協会も後押ししていたはずだが、その後の続報を聞かない。推測だが、ミュールのレースは年々縮小しており、いまやカリフォルニア州のフェア競馬5開催に残るのみ。多額の費用をかける余裕も意味も無くなってしまったのではないだろうか。

続いていまから20年前、平成8年の4月。この月は「回避ショック」が続いた月だ。

まずは桜花賞のエアグルーヴが熱発で回避、続いて皐月賞のダンスインザダークも熱発で回避となった。ともにレース直前での熱発であり、ファンからマスコミまで大騒ぎとなったものだ。災難だったのは武豊騎手で、桜花賞ではシーズアチャンスに乗ったが6着。皐月賞は騎乗馬がなくなり、裏の阪神メイン・難波Sをファンドリリヴリアで勝って溜飲を下げた。

この月は地方競馬で大きな話題があった。ひとつはこちら。平成8年4月7日付の日刊スポーツから。

「地方競馬初の芝コースも備えた新・盛岡競馬場『オーロパーク』（ラテン語で黄金の意味）が6日、華々しくオープンした。開場に先立ち、常陸宮正仁親王殿下ご夫妻、デヴィッド・ライト駐日英国大使夫妻のテープカット、記念植樹が行われた」

このオーロパークがオーバースペックすぎて岩手競馬廃止騒動の一因にもなっていくのだが、一方でこれだけ派手にぶち上げ、JRAとも良好な関係を築いていたので存続できたとも言える。

もうひとつの出来事はこちらだ。4月9日付のサンスポから。

「大井の夜が燃えた。8日夜、東京・大井競馬場で行われたトゥインクルの第8～10レースで、日本初の『馬番連勝単式』の勝馬投票券が発売された。連勝複式形式だった従来の馬券より配当率が高い画期的なシステムの導入により、春の夢を求めるファンが殺到して大フィーバーとなった」

配当率が高いという表現は意味不明だが、おそらく高配当が望めるということだろう。当時は馬単でも夢の高額配当馬券。10万円20万円の馬券が出ただけでも新聞記事になった時代だ。この「馬単初日」、対象レースの売り上げは対前年で48%増だったという。

最後にいまから30年前、昭和61年の4月。この月には、おそらく日本競馬史上最大であろう、変造馬券事件が起きている。正確には、主犯がこのタイミングで逮捕されている。変造馬券というと、文字の部分を書き換えたりして他人に売りつけるのがパターンだが、こちらはだいぶ本格的で、しかもいったんはJRAから金を取ることに成功している。新聞各紙が大きく報じたが、代表して昭和61年4月2日付の読売新聞夕刊から引用させてもらおう。

「磁気データの偽造馬券による払戻金詐取事件で、警視庁捜査三課と富坂署は2日までに、すでに有価証券偽造、同行使、窃盗未遂の疑いで逮捕したAの供述から、主犯のBを同容疑で逮捕した。Bは調べに対し、『仕事で得た専門知識を利用して、馬券磁気面のデータの解読、偽造機械を作った』と供述している（以下略、元の記事ではABは住所入り実名）」

いまならばすべての券面に関するデータがサーバーに保存され、常時結ばれた払戻機から、それが実際に発売された券面・内容であるかを照会できる。しかし当時はそこまでコンピューター技術、ネットワーク技術が進んでいない。磁気面にはレースと買い目、金額が記録されており、その内容が的中であれば払戻機からお金が出てきてしまう状況だったということのようだ。いまのファンからは想像もつかないだろうが、昭和61年といえば札幌から先にやっと光ファイバー回線が延びて、ウインズ釧路にやっとレース映像が届くようになったという年である。

14日付の東京新聞には、

「桜花賞競走が行われた6日の阪神競馬で馬券発売機が故障し売上金、投票枚数の集計に誤りがあったことが、12日明らかにされた」

という記事もある。手計算（ソロバン）による票数集計が中央競馬から姿を消したのが昭和51年（1回小倉が最後）。それから10年しか経っていないタイミングだ。それだけトータリゼータシステムも発展途上だったし、隙もあったということだろう。

そんな隙を突いての犯行はすぐに判明しただけでも2000万円以上に及んだようだが、それでも最終的にはやはりバレるものなのである。

ムカシの競馬を読む

平成18年・中山競馬場
皐月賞
優勝馬：メイショウサムソン

© JRA